ハチ公の異世界日記(仮)

日野二番

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハチ公の異世界日記（仮）

【Ｎコード】
Ｎ３４６３Ｘ

【作者名】
日野二番

【あらすじ】
よくある異世界召還もの？
従姉妹で幼馴染に誘われて（拉致られて）参加したネットゲームのＯβ。その世界に閉じ込められた！・・・・はずなんだけど。なんだか変だ。

処女作です。
試行錯誤しながら投稿しているので頻繁に改稿しています
誤字脱字や読みづらいことが多々ありますがご容赦ください。

感想や指摘、罵倒などいただけるとありがたいです。

まえがき

どうやらぼくは見知った世界では無いどこか別の場所にいるようだ。
幸運なことに知らない名詞は出てくるが、言葉は通じるし
今のところ衣食住に困らない状況ではある。
同じ境遇の同行者もいる。

しかし見知った世界とは違い
明日、何が起こるかもわからない危険な所であるのには変わりない。
――実際初日だけで何度か死にかけた。

この手帳にはこの知らない世界での出来事を書いていこうと思う。

ぼくの身に何かあったとき、
誰かがこれを見つけて役に立ててくれることを願う。

1日目（前書き）

異世界1日目。

本日の出来事

・セカンドアース世界（？）に来た。帰り方が分からない。
・猫耳。猫尻尾。
・山賊？山じゃないから森族？に襲われた。
・テオに助けられてイツホ村に来た。

1日目

僕は途方にくれていた。

座り込んだ道端から見上げた空には雲一つ無く、今まさに沈もうとしている太陽の光が目に痛い。

電線がないと空が良く見えるな。とか、やっぱり太陽が沈む方が西なのか。とか、そういえば西から昇ったお日様が東に沈むって何だっけなー。とか現実逃避していたら道を挟んだ正面からから声を掛けられた。

「…で、これからどうするのよ？ハチ。」

普段は弾むようなソプラノだけど、今は空気の抜けたボールの様に張りがない。こころなしかトーンが低いのは彼女ノエルが怒っているからだろうか。

「…そうだね、先ずは寝る場所と飲み水の確保、火起こしかな。出来れば食べ物も」

「それはそうなんだけど、そうじゃ無くて…あーもう！なんでそう冷静なのよ？今の状況判ってる？」

あ、怒った。

「うーん。どこか知らない場所で、たぶん従姉妹と、遭難？してる。…たぶん。」

思ったことをまとめずに口に出したら、何度もたぶんって言ってしまった。

実際よく分からないんだから歯切れの悪い回答にもなるさ

「遭難って…まぁ帰り方が分からないんだからそうも言えるのかな」

そうなんですよー。とかボケてみたら軽く睨まれた。怖い。

…それにしても夕日が眩しいなー

「ってかハチ？人と話す時はちゃんと目を見て話しなさいよ」
何時の間にか近づいてきた彼女が夕日を遮り僕の目をのぞき込む。

街を歩けばすれ違った人の半分は振り返り、そのうち何人かは声をかけようと寄ってくる程に整った顔立ち。本人は気に入らないようだけど、ちょっと低い鼻と喋ると口から覗く八重歯は彼女の容姿を親しみの持てるものにしている。

ただし近寄ってきた輩はその切れ長で少し釣り気味の目に睨まれ、それ以上に気の強い彼女の内面に気がつきすごすごと退散していく。

その上、今ノエルの瞳の色は、肩口に切りそろえられた髪と同じ薄い金色。満月のようで綺麗だ、とは思うが迫力がいつもの５割ましだ。真正面から睨まれると怖い。マジで。

「……何よ？言いたい事があるなら言いなさいよ」

視線を空からノエルの顔に変えられ、しばらく固まっていると、その沈黙を何か話すのを戸惑っているものと勘違いしたらしくぼくの発言を促してきた。

特に何か言うつもりはなかったのだけど…彼女の命令は絶対だ。とにかく何か言わなければいけない。

「えーっと。…よく似合ってるよ。その…猫みグェばっ」

言い切る前に高速で鳩尾に蹴りを入れられ、ぼくは悶絶した。選択肢を間違えたらしい。

そう。ノエルの頭には人間のモノとは別に、一対の獣の耳が付いていた。それだけでは無く、腰の下あたりからは髪と同じ色の毛に覆われた尻尾が覗いている。時折ぴくぴくゆらゆら動いているのを見る限り、どうやら本当にはえているようだ。

蹴られた鳩尾を押さえ反射的にうずくまると、自然とノエルの強視線から開放された。怪我の功名ってやつか。

…しかしあれはどう見てもＯＰで見た獣人族だよなぁ…とするとやっぱりここはセカンドアースの世界なんだろうか。ぼくは鳩尾の激痛を忘れるために今日何度目かになる現実逃避をはじめた。

すなわち

どうしてこうなった？

◇◇◇

Ｆｒｏｍ：神崎　聖夜

Ｓｕｂ：なし

本文：１８時に家

昼休みにこんなメールが来た。いつもの事だけどものすごく簡潔だ。絵文字？なにそれおいしいの？

とても年頃の女の子のメールとは思えないけど、いつだか聞いてみたところ他の人にはちゃんとそれなりにしているらしい。

ぼくだけ！って言うとなんだか特別な気がするけど、単にぼくにつかうほど余っている気が無いんだろう。というか実際言われたし。

「おい何だよハチ。・・・ちょ！神崎先輩からメールだと？」

―なにっ！

―ハチの癖に生意気だぞ！

―うらやましいやつめ！

―お姉さまからのメールですって！？

―従姉妹だからと言ってそんな役得があって許されるのだろうか？

いいや！否！断じて否だ！！

失礼にも携帯を覗き込んできた友人（バカ）の発言で、クラス中が騒然と

する。いつものことだからいい加減慣れたけどちょっとうざい。
「はいはい。ごめんね何時ものパシリ命令だから特に何にも無いよ」
何時もの　という一言に反応しさらにヒートアップするクラスメイトをスルーしつつ返信する。
5分以内に返信しないと後で怖い罰ゲームが待っている。これもぼくだけの特別処置！やったね！

Ｔｏ：神崎　聖夜

Ｓｕｂ：Ｒｅ；なし

本文：了解です。何か持っていくものは？

熱しやすく冷めやすいのが取り得の我がクラスはメールを送り終える頃には殆ど落ち着きを取り戻していた。…一部がまだ恨みがましい視線を送ってきているが気づかない振りをした。
「しかしハチがあの神崎先輩の従姉妹とはなぁ・・・・未だに信じられんわ。というか信じたくない」
さっき起爆した友人、福本が昼食のパンをかじりながら絡んでくる。
「前にも言ったけど親が兄弟なのはほんとだよ。あとそれぼくのパンだから。」
「いいじゃん硬い事いうなよ。変わりに俺の牛乳やるからさ。これ飲んででっかくなれよ！」
余計なお世話だ。

確かにぼく神崎英人と神埼聖夜は似ていない。父親同士が兄弟なのは確かだけどぼくの母が純和風なのに対して彼女の母親は半分フ

ランス製だ。つまり彼女はクオーターと言うことになるのだけど、ハーフの母親より日本人離れした容姿をしている。隔世遺伝とかメンデルがどうだとか聞いた気がするけど、物心ついたときから知っているぼくからしたら薄い髪の色とかいかにもな蒼い眼の色なんて些細なことでしかない。

親同士仲がいい上家も近いと言うか隣同士で、それこそ小さい頃は同じ風呂に入れられていたような仲だ。容姿なんて見飽きている。彼女の外見なんてほんの一部でしかない。彼女の内側はそんなやわではない。

幼稚園の頃だったか。

その容姿をからかわれた彼女は、その日の夕方いじめっ子を背後から強襲。泣きながら家に帰ってきたぼくを見た両親たちがあわてて現場に駆けつけるまで背後から馬乗りになって泣きじゃくるいじめっ子を殴っていたらしい。

それを見た彼女の両親は頭を抱えた。曰く「このままでは可愛い娘が卑怯者になってしまう」と。

それから彼女は彼女の将来を憂えた両親によって空手だか合気だかの道場通いを強制され、心身ともに健全に成長し、今では「道場の中でなら敵は師範だけ。」と豪語するほどになってしまった。

他にもある。

たしか小学生の頃だったか

駄菓子屋の前に置いてあるゲーム機で、汚いハメ技を使って子供たちの僅かな軍資金を浪費させている高校生を見かけると、一週間ほどの猛特訓をし（ぼくは付き合わされて半泣きだった。もちろん軍資金はぼくが出資）件の高校生に挑戦状をたたき付け、見事完全勝利。高校生が泣いて謝るまで殴るのを止めなかったらしい（ゲーム

的な意味で）

その後も研鑽を続け、今では「闘劇？あのこなら優勝狙えるよマジで」と馴染みのゲーセンの店長に言われるレベルになっていた。

中学校の時は生徒会長を2期やっていた。1年目で教職員を完全に掌握し、2年目は正に王国だった。（ぼくは副会長と言う名のパシリを任命された。彼女が卒業した後のごたごた処理も全部やらされた。）

高校に進学するに当たって方向性を変えたらしく、ぼくが入学したときはすでに校内一のアイドルのポジションに立っていた。男子だけでなく女子にも絶大な人気を誇り、噂では教職員にまで及ぶファンクラブを持っているらしい。

他にも大小さまざまな所業があるけど、全部を通して言えることがある。

彼女は真面目で、正義感が強く、やり始めたら極めるまで止まらず、そして大抵やりすぎる。

放課後になるとすぐメールが届いた。

Ｆｒｏｍ：神崎　聖夜

Ｓｕｂ：Ｒｅ；Ｒｅ；なし

本文：動きやすい格好。遅れるな。

◇◇◇

「・・・っおじゃましまふ！」
彼女の家に駆け込みながら正面にかけてある時計を見る。１７：５８間に合った。
「来たわね。あがりなさいよー」
割と全力で走ったばかりで息の上がっているぼくに二階から声が降ってきた。どうやら彼女の父の仕事部屋にいるらしい。
「おじゃましまーす。」
明かりの漏れるリビングに向かって今度こそ噛まずに告げるとぼくは階段を上っていった。

彼女の父、ぼくにとっての叔父はビデオゲームのデザイナーをしている。今までにもテストと称して開発中のゲームをプレイさせてもらうため、何度か仕事部屋に入ったことはあった。だから今回もその類だと思ったのだけど部屋に入ったぼくを待ち構えていたのは、ラフな部屋着とフルフェイスのマスクのような物を身にまとった聖夜だった。
「なにそれ。何かのコスプレ？」
「違うわよ。あんた叔父さんの仕事知らないわけ？」
呆れたような口調で返された。彼女の言う叔父さんって言うとぼくの父親のことだけど・・・
「・・・あ。ＢｒａＳＳＨＵＤ（ぶらすはっど）か。でも何でこんなとこに？」
ぼくの父はある医療用電装機器メーカーに勤めている。そこで開発されたのが、このブラスハッド正式名称は脳構造捜索型なんとかだったとおもう。詳しい原理はよく分からないけど、これを使うと遠隔医療だとか習熟訓練だとかが効率的にできるようになるとかの画期的な発明らしい。
今のところ高価すぎて医療分野や軍事分野にしか利用できてないらしい・・・けど
「そりゃまぁこれ使ってゲームするからよ。ハチの分もあるからさ

っさとしなさいよ」
　神崎の家系には無茶をする血が流れてるらしい。ぼくはいたって普通なのになんで。
「何固まってるの？世界初の全身体感ゲームを体験できるんだから光栄に思いなさいよ？」
　…どうせ拒否しても無理やり参加させられるんだから、痛いことされる前に自分から進んでやった方が頭良いよね。
「ちょっとこれ・・・ゆるい。がくがくするよ？」
「ん・・・ちょっと後ろ向いて。そう。これアジャスターだから、こう」
「いたたたたちょっと締めすぎ！痛い！」
「ちょっときついくらいが良いの！・・・はいこれでオッケ」
　結局痛い事された。

「んじゃ、バイザー降ろして。アカウントとかは勝手に設定しといたから。・・・始めるわよ」
　なんだか今日一番の横暴発言を聞いた気がするけどつっこみを入れようとしたぼくの意識はそこで途絶えた。

ーーーーようこそ　セカンドアースへ

意識を失う直前にそんな声が聞こえた気がした。

0日目

「ハチ聞こえる？・・・おーい？」
壮大なバックストーリーを説明するようなオープニングムービーが終わり、真っ暗になった世界で呆けているとぴろりん、という軽い音と共に彼女の声が頭の中に響いてきた。
反射的に周りを見るが、誰もいない。というか真っ暗で何も分からない。
「聞こえるなら返事しなさいよー・・・・あ、個チャは相手の名前をフレンドリストから・・・・」
基本的なメニュー操作や会話方法を彼女に教わった。
「本来はチュートリアルがあるんだけど・・・ハチのキャラ作った時に飛ばしちゃったから。まぁ、習うより慣れろ、よ」
「（なんという横暴・・・）うん。大体分かったよ。ところで真っ暗なんだけどここはどこ？」
「真っ暗・・・？今は昼のはずだけど・・・あ！わかった。そうだそうだ。っふふ」
なんだか自己解決された上に笑われた。ひどい。
「あー。ごめんごめん。ハチ、あんた目を開けなさい。目を開けるって考えるだけで良いわ。」
「目を開けろ・・・ってもう開け・・・・」
瞬間目の前に抜けるように蒼い空と一面緑の下草に覆われた草原が広がった。
「・・・凄い。本物みたい。」
「ふっふっふ。当然よ脳がそう感じてるんだから、そこに偽者と本物の差は無いわ。」
なぜだか自慢げに語る彼女。聞き流しているうちにもまるで視覚

の覚醒を待っていたかのように五感全てに情報が入ってくる。
空を飛ぶ鳥の鳴き声。頬に当たるのは草原を掛け抜ける風。・・・
そしてその風が運んでくる生臭い臭いと何かのうなり声。
「・・・そうそう。そこは初心者エリアだから私は行けないわ。
ゴブリンとかワイルドウルフだとか雑魚ばっかりだからさくっと片付けて出てきなさい。」
はいきました。何時もの無茶振り。すでに緑色の小人但し鋭い牙と棍棒付に追いかけられてます。
「自分の身くらい自分で何とかしなさいね。じゃぁ待ってるから」
ありがたいお言葉を最後に個人チャットが終わる。すぐ背後まで迫る足音とうなり声に、ぼくは逃げ切れないことを悟ると覚悟を決めて手に持った杖を振り向きざまにフルスイングした。
「ぐべらヴぁっ」
なんとも言えない叫び声と気味の悪い体液を派手に撒き散らしながら吹っ飛ぶ緑色の小人(ゴブリン)。会心の手ごたえとは裏腹に、短い放物線を描き地面と再開したゴブリンは、すぐに起き上がると一掃激しいうなり声をあげながら襲い掛かってくる。
どうやらぼくの渾身の一撃は、もともと潰れたような鼻を陥没させただけで大したダメージになっていないようだ。
(思い出せ。確かさっき何か説明されてたぞ・・・)「・・・ハチの職(クラス)は武器での直接攻撃は苦手で、防具はがんばっても革製品までで紙より弱い防御力だから。まぁあなたにはぴったりの職だと思うけど・・・あ、その代わりにファンタジーの代名詞ー魔法ーが使えるわよ。それから・・・」
(そうか魔法!スキルメニューの魔法タブからエナジーボルトを選択、攻撃対象はゴブリンっと)
選択された魔法の矢が発動可能状態(アクティブ)になり、両手に持った魔法の杖が青く光り始める。
「よし!食らえエナジーボルト!」
勢いで叫んでしまった後で技の名前を叫ぶってちょっと痛くない

？とか考えたけど一瞬でどうでもよくなった。

赤い血にまみれたピンク色の肉。白く輝く骨の欠片。胃の中にあったと思われる消化しかけの何か。得体の知れない汚物。比較的原型を残した下半身。

ゴブリンが気味の悪い物体に変わって四散する場面を至近距離で見てしまったからだ。

エナジーボルトは初歩の魔法で、魔力を矢の形に形成し敵にぶつけると言うものらしい。
この魔法の矢は目標に当たったときこめられた魔力に応じた熱量を撒き散らす。
効果は対象にもよるけど「まぁまぁ使える」とのことなので、実際試してみた。

結果。

ゴブリン（体長１ｍくらいで防具無し）→爆散
地面→直径１ｍ位のクレーターが完成。
一抱え以上の太い樹→真っ二つ。断面は黒こげ
ちょっとした池→三分の一が一瞬で蒸発。残りは熱湯になって茹で魚が浮かんでいた。

結論
びっくりするほど大威力！

・・・なんだこれ。

◇◇◇

魔法の試し打ちをしばらくしていると、ぴろりんという音が聞こえた。彼女だ。

「ちょっと何時まで待たせる気？待ちくたびれたんだけど。」

「・・・まだ１０分くらいしか経ってないよ？」

この初心者用エリアはレベル１０までしか入れないらしい。つまり逆に言えば最低でもレベル１０になるまでここから出るな、と言うことだろう。因みにぼくはさっきレベル３になった所だ。

「１０分しか、じゃなくって１０分もよ。あと５分以内に出てこなかったら」

「今すぐ行きます。」

ぼくに選択権は無い。

初心者用のエリアを出るには草原を貫く道沿いに歩いていけば「そのうち分かる。」らしい。制限時と言う名の死の宣告を与えられたぼくは全力で走った。

いい加減息が上がってきたところでそれは突然目の前に現れた。

高さは３ｍ位で道幅いっぱいに広がる白い靄。枠も無いのに同じ形を維持しているのを見て、これが出口だろうと確信し、走りこんだ。

３秒ほど走ったところで急に靄が晴れ・・・急に視界が回転し、次の瞬間なぜか空を見上げていた。

「走ったりして危ないじゃないの。誰かにぶつかって怪我でもさせたらどうするつもり？」

初心者を出会い頭に投げ飛ばした危険人物が呆れ顔で世の常識を説いた。

「だからと言って反射的に人を投げるのはどうかと思いたたたｔ」

そのまま腕も決められた。

「・・・まぁ良いわ。私を待たせた罰はこれで勘弁してあげる。」

と、彼女にしてはあっさりと拘束を解くとそのままぼくの手をとり立たせながら満面の笑みで言った。
「じゃぁ改めて。ようこそセカンドアースへ！」

ぼくは手を引かれ、起き上がりながら目の前の黒髪黒目の少女の顔を凝視した。
「どうしたの？私の顔に何かついてる？」
黒髪黒目の少女が彼女の声で喋りかけてくる。メニューから対象のステータスを確認…

名前：ノエル
ＬＶ：４７
種族：人間
クラス：武術家（ファイター）
状態：健康

間違いない。彼女ーノエルだ。
「ねぇ…その髪と目…どうしたの？」
「ああこれ？キャラメイクの時に弄ったのよ。…似合うでしょ？」
「うん。もちろん黒も似合ってるよ。」
回答まで０．２秒。常日頃の体罰（ちょうきょう）を伴う訓練の成果だ。彼女のこういった問いには可及的速やかに返事をしなければならない。もっとも、今回の場合は本心からの感想だから難易度は低かった。
「そう？ま、当然よね。・・・実は他にもちょっと弄ってるけどハチも私も大体は現実の体と同じよ。」
反射的にノエルの胸元で現実の５割り増しに揺れているモノをちら見する。突っ込むべきか一瞬迷ったけど止めておいた。せっかく機嫌が良いのだからこのまま維持するのが上策だろう。

「さて。じゃぁさくっとレベル上げとこうか。目標は今日中に２０

ね。狩場に案内するから着いてきて」
「え、ちょ。そんなに?まだ一桁なんだけど。」
「だーいじょうぶよ。ちゃんと1時間目には間に合うから。私に任せておきなさいって」
「いやその計算はおかしい。」

などとノエルの廃ゲーマー発言に突っ込みを入れつつノエルの言う狩場へと向かう。何度か白い靄を潜りたどり着いたそこは、ごつごつとした巨岩が立ち並ぶ奇妙な荒地だった。その中でも一際大きい3mほどの岩に飛び乗りストレッチをしながらノエルが言う。
「んじゃぁハチは適当にぐるっと一周してきて。はいダッシュ!」
「説明も何も無いね!さすがノエル!」
「つべこべ言わないで走る!走りこみは全ての基本よ!」

ぼくに拒否権は無い。それから荒地を駆け回った。強化された仮想の体は、現実の体よりもずいぶん体力があるみたいだけど、「左折!」だとか「そこでインド人を右に!」だとか「ちんたらするな!ばかなの?死ぬの?」だとかの意味不明の指示?のおかげで一周する頃にはぐったりだ。
「ぜぇ・・・はぁ・・・も、もう勘弁して・・・・」
「何よこれくらいで。だらしないわねぇ・・・普段から運動しないからいざと言う時に困るのよ?」
「いや・・・これ、げ、ゲームだから・・・うぅ・・・岩がうねうねしてる。・・・さ・酸欠で幻覚まで・・・」
「とーっても残念だけ、どハチの目は正常よ?それモンスターだから。」
「・・・・・・ぇ?」

ノエルの愉快そうな声に頭を上げたぼくの目の前を岩塊がうなりをあげて通り過ぎる。さっきまでぼくの頭があった場所を豪快に素

通りし、轟音と共にぼくの足元に小規模なクレーターを作り出したそれは大きな大きな岩の拳だった。
「・・・っ！・・・っ！！」
「なに？鯉みたいにパクパクしちゃって。えさでも欲しいの？」
「・・・っいらないよ！って死ぬところだったよ！！」
「律儀に突っ込むわねぇ。そう言うところ、結構好きよ・・・それより前のだけじゃなくて、後ろにも気をつけ無いと本当に死ぬわよ？」
「うしｒひゃおぅ！！」
振り向いたぼくの喉から変な声が出た。ぼくの背後には体長おおよそ３ｍの立派な石人形（ストーンゴーレム）が無数に蠢いていた。ずいぶんゆっくりした動きに見えるが、歩幅が大きいため速度は速い。
「ここいら中の石人形が集まったから、なかなか壮観ねー！走りこんだ甲斐があったってもんねっ♪」
「ノエル！ぼくを撒き餌にしたね！？」
「ハチは犠牲になったのよ・・・っと。そろそろどうにかしないと、本当にまずいわよ？」

言われなくても分かってる。後ろの集団との距離はもう１０ｍほどしか無いし前にいた石人形はすでに腕を振り上げぼくをミンチにする準備を整えている。
（こいつら動作はとろい。振り下ろすタイミングを見切れば・・・いまだ！）
石人形が右拳を振り下ろすと同時に、石人形の左に向かって走りこむ。ぼくを追ってきた巨大な右拳はまたしても空を切り、乾いた地面にクレーターを作った。無防備に背中を晒す石人形に向かって、すでに青く光る杖を向ける。
「砕けろっ！エナジーボルト！」
轟音と共に魔法の矢が突き刺さる！

だけだった。
完璧なタイミングで発動、命中したぼくの魔法は数ｃｍのくぼみを作っただけで消滅した。

「まぁ当然の結果よね。適正レベル３０～のモンスターに初期魔法じゃあ歯が立つわけが無いわ。」
「やっぱりー！？」
「でもなかなかいい動きよ。やっぱりハチを連れてきて正解だったわ」
ノエルに褒められた。それだけで一瞬この状況を忘れそうになる程に胸が高鳴った。
「じゃぁさくっと片付けるから、ハチは適当にエナジーボルト撃ってて。」
「え、片付けｒ「＞＞闘の声（ウォークライ）＜＜発動！！」
ぼくの台詞をさえぎりノエルが叫えた。到底一人の女の子が発しているとは考えられないような迫力の声は、周囲の石人形の意識を釘付けにしたようだ。その結果に満足したように頷くと、ノエルは石人形の集団に飛び込んだ。

・・・その後はまさに無双状態だった。どこからか取り出した八角棒と体術をたくみに操り、いなし、突き、引っ掛けて掌打、いなして、跳んで、正拳、ハイキック。笑みさえ浮かべながら踊るように闘うノエルに完全に見とれてしまい、我に返ってエナジーボルトを撃ち始めた頃には半分以上の石人形が粉々になっていた。

「これで終わりねっ・・・・と」

最後の石人形を豪快な後ろ回し蹴りで粉砕（文字通り粉々に砕いた）すると、ノエルも流石に疲れたのかすでにＭＰ切れで大の字に伸びているぼくの横にぺたんと座り込んだ。

「・・・ぼくの魔法、オーバースペック気味に攻火力だと思ってたけど、そんなことなかったんだね。」

「まぁ大分レベル差があるし、まだＯβと言っても殆どテストプレイヤーいないみたいだから・・・バランス調整はこれからってところね」

ぼくの髪を弄りながら彼女が続ける。

「それにハチの職は火力職じゃ無いから。附与術師（エンチャンター）の売りは戦闘補助よ。味方の身体能力を上げたり、敵の行動を妨害したり・・・私の計算では狩り効率を５割は上げれるわ。」

ぼくの耳を引っ張ったりねじったりしながら、彼女は続ける。

「将来的にはＰｖＰでも大いに役立ってもらうつもりだから、そのつもりで精進してね？・・・そうそう。そのためにもスキルくらいイメージだけで発動できるようにしときなさい？一々メニューから選ぶなんてとろすぎ・・・何よ？」

ぼくの頬を意味もなく抓っていた彼女はぼくの恨めしげな視線に気づいて手を止めた。

「つまりは、ノエルの狩り効率のためにぼくはこのゲームに参加してるわけだ。あと痛いからやめて。」

「ち、ちが・・・わ無いけど。その・・・。」

ノエルにしては歯切れの悪い返答だ。でも頬を抓るのは止めてくれない。

「ん・・・？まぁ、良いか。結構楽しいし。」

「そう？そうよね♪楽しければ良いのよっ」

何がよかったのか急にテンションの上がったノエルは、ぼくの頬を張ると勢いよく立ち上がった。痛い。

「んじゃぁ後半戦始める前に夕飯食べに戻りましょ。お母さんハチ

の分も用意してくれてるって」
「痛い・・・。ってほんとに後半戦やるんだ?ぼく明日小テストあるんだけど・・・」
「そんなのハチなら余裕でしょ?先にログアウトしてるからねー」
無責任な捨て台詞を残し、ノエルが消えた。ログアウトしたようだ。
「まじでか・・・さすがに徹夜は勘弁してほしいなぁ」
ぼくは明日の徹夜明け小テストに軽い絶望感を覚えながら、メニュー画面からログアウトを選択し、目を閉じた。

結果的に、この心配は杞憂だった。。
なぜか?目を開けたぼくが見たのは、見覚えの無い森の中の道だったんだ。

1日目（2）

気がつくとまったく見覚えの無い、森の中を走る道に立っていた。未舗装の道の両側に鬱蒼と茂る木々は日の光を遮り昼間だというのに薄暗く、見るものに何かが潜んでいるような錯覚すらあたえている。

「ここ・・・どこ？」

思わず疑問が漏れる。ぼくは夕飯休憩のためにログアウトをして…いつの間にかここに立っていた。ログインしている間に拉致でもされたんだろうか？見上げると雲ひとつ無い青空が見えた。木々に遮られて太陽は見えないが、明らかに日は出ている。ログインした時間には日が落ちかけていたから、少なくとも日没しているはずなんだけど・・・？

「・・・ハチ？」

突然予想外の方向から声を掛けられ、心臓が跳ね上がる。声の主はどうやら木の上にいるようだ。道に張り出した木の枝葉に隠れて姿は見えないけど、この声はノエルだ。

「ノエル？よかった。ぼくだけかと思ってた。なんで木の上（そんなところ）にいるの？降りといでよ」

「それは・・・。そんなことより、ハチはここがどこだか分かる？」

一瞬言葉に詰まったノエルはぼくの質問に答えず、逆に聞き返してきた。

「全然。心当たりすら無いよ・・・そっか。ノエルも分からない所なんだ。」

「・・・でも、私には心当たりあるの。ここ、きっと―セカンドアースの世界よ。」

ゆっくりと言い聞かせるかのようにノエルが言う。あまりも唐突過ぎる話に、ぼくの思考は瞑想する。とうとうノエルが壊れたか・・・？これが噂のゲーム脳？

「メニューも開けないし、個チャとかのシステムも使えないみたいだけど・・・間違いないと思うわ。」
「ちょっと待って。言いにくいんだけど・・・ノエル熱でもあるの？頭打ったりとかしてない？」
「私はいたって正常よ？」
「でも・・・ちょっと診てあげるから降りてきてよ。」
「・・・まぁこんな事いきなり信じろって方が無理あるか。分かった今降りるわ。でも、診るんじゃなくよく見て。」
そう言うとノエルは木の上から跳躍、ぼくの目の前に音も無く着地した。固まるぼくに向かって、金の髪と瞳を持つ猫耳少女がもう一度言う。
「私たちは今、セカンドアースの世界にいるわ。」
「なんてこった・・・さっきメニューが開けないとか言ってなかった？」
「そうよ。つまりはログアウトできないから―現実世界への戻り方も分からないの」
ぼくはすぐさまメニュー画面を開こうとする。が、すぐに事実を再確認すると道端にへたり込み、空を仰いだ。
なんてこった。

回想終わり。長い現実逃避の結果、多少の落ち着きを取り戻す事に成功したようだ。ぼくは今後の方策を検討しながら立ち上がった。
「・・・今日は日も暮れるし、寝れる場所を確保しようか。明日になったらこの道をたどって人を探しに行こうよ。」
見事な夕焼けを見ながら何事か考えていたノエルに声を掛けると、

なにやら複雑な表情で頷かれた。一先ず異存は無いようだけど、なんか気になるなぁ・・・うーん。

そのまま無言で野宿する場所を探しながら歩き出す。二人とも当然野宿の経験なんか無い。柔らかそうな下草や乾いた落ち葉なら、硬い地面よりましかなーとか。その程度の考えできょろきょろしていると不意にノエルが立ち止まった。見ると、険しい表情で中を睨んでいる。頭の上では猫耳がせわしなく動き、周囲の状況を探っているようだ。

「・・・たぶん5人に囲まれてる。友好的ではなさそう。」

小声でノエルが告げる。ぼくには何も分からないけど、やっぱり猫耳は伊達じゃないようだ。

そのまましばらく様子を伺っていたノエルは、ゆっくりと八角棒を担ぐと堂々と喧嘩を売った。

「それで隠れてるつもり?いい加減こそこそしてないで出てきなさい!女の子相手にびびってんじゃ無いわよ!」

言い終えるかどうかという時に、森から人影が現れた。前に3人後ろに2人、それぞれ手には棍棒やらナイフやらの得物を持っているけど、全体的に軽装だ。

「ずいぶん威勢のいい獣人だな・・・ほう、こりゃなかなかの掘り出しもんじゃねーか」

「こりゃ楽しめそうだぜぇ。売り飛ばす前にたっぷり可愛がってやるよ」

「俺は男の餓鬼をもらうぜぇ?文句ねえよな?」

「好きにしろよ物好きめ。ただ顔は潰すなよ?価値が下がる」

「そんときはそんときだろ。俺がばらすぜぇ」

野盗ＡＢＣＤＥが口々に下卑た台詞を吐きながら近寄ってくる。全身時鳥肌が立ったけど、原因は野盗（変態）じゃぁない。隣に立つノエルがぶち切れる音が聞こえたからだ。

無言で半身になり正面の野盗Ｃに踊りかかると、意表を付かれた

野盗Cの棍棒を持つ手ごと弾き飛ばしそのまま振り上げた棒を脳天に叩き付けた。硬いものの砕ける音とともに全身の力を失い崩れ落ちる野盗C。その股間を踏み抜きノエルが吼える。

「次にこうなりたい奴、かかって来なさい！」

一瞬の静寂の後、たった5秒でヘイトを極限まで高めたノエルに、野盗4人が襲い掛かった。その動きには油断や手加減のようなものは見当たらなかった。

最初のうちは互角以上に立ち回っていたノエルだが、4人の容赦ない連続攻撃に曝されすぐに押され始めた。まだ全ての攻撃を捌いているが、いつ均衡が破れてもおかしくない。その前にぼくが何とかしないと。

（もしここがセカンドアース世界なら、ぼくはきっと魔法を使える。スキルメニューも杖も無いけど・・・開発者（ノエル）の娘はイメージだけで魔法は使えるって言ってた。それなら・・・）

頭の中に魔法の矢を思い浮かべる。杖ではなく自分の手を使い矢を射るイメージ。

目を閉じ、矢をつがえ弓を引き絞る。

瞼の先に、ノエルを襲う野盗（まと）を見る。

目を開き、青く輝く両手の先に、実物の的を見すえ―曝散するゴブリンのイメージが重なり、ぼくは固まった。

・・・ぼくに人が撃てるのか？

頭の中で野盗とノエルの命を天秤に掛ける。一周する勢いで天秤はノエルに振れる。当然だ。そんなこと考えるまでも無かった。では撃てるのか？撃てば確実にぐちゃぐちゃの肉片になる。もちろん、死ぬ。いや、ぼくが殺すんだ。殺す。殺す。終わらせてしまう。

冷や汗を流しながら攻撃態勢のまま固まるぼくにとうとう野盗Aが気付いた。ばっちり目が合ってしまった。

驚いた顔で何か叫びながら走ってくる野盗Ａに、ぼくは覚悟ができないまま狙いを定める。一瞬が無限に引き伸ばされるような感覚。そして―

・・・・次の瞬間、空から降ってきた黒い毛皮の塊に野盗Ａが押し潰された。

「今、颯爽とテオ様参上！俺が来たからにはもう安心だ！覚悟しろ悪人ども！」

黒い毛皮の塊（クマのようなけもの）とともに振ってきた半裸の男が、腕を組み仁王立ちで宣言する。

突然の闖入者に唖然とするぼくと野盗たちをよそに、いち早く混乱から立ち直ったノエルが残りの野盗を制圧した。ついでにイメージをかき乱された魔法の矢は霧散した。

なんなんだこの状況。

2日目（前書き）

異世界2日目

本日の出来事

・村長に挨拶をし行った。ついでに情報収集。
・顔見せついでに手分けして村の手伝いをする。
・テオが街に行った。明日帰る予定。

2日目

―ピピピピピ

愛用の目覚まし時計の電子音(アラーム)で目が覚める。カーテンの隙間からは、朝だというのに自己主張の激しい太陽が寝不足のぼくの顔を照らしている。いい天気だ。

手早く朝の準備を済ませ玄関を出ると、ちょうど隣家からノエルが出てきた。ぼくと睡眠時間は変わらないはずなのに、表情は晴れやかだ。

―おはよう

―おはようハチ・・・酷い顔ね。今日小テストじゃなかったっけ？ずいぶんと余裕ね♪

―寝不足の原因はどう見てもノエルです。本当にありがとうございました。

―あら、お礼なんて良いのよ？

ダメだこいつ。いつも通り完全にノエルのペースだ。

―・・・そろそろ行かないと遅刻ね。ちょっと急ぎましょう。

―わかったよ・・・ねむ・・・・。

あくびをしながら恨めしげに太陽を見上げる。初夏の朝日に容赦なく照らされ、ぼくの意識は遠のく。

―やば、、、倒れる。

驚いたようにぼくを見て、何か叫んでいるノエルの顔がブラックアウトすると同時に膝の力が抜け―

ずべたん！

シーツを引き抜かれた反動で巻き藁で作った即席ベットから転げ落ち、ぼくは目を覚ました。
「・・・おはようノエル。」
「おそようハチ。・・・いつにも増してひどい顔ね。顔でも洗ってきたら?」
さっきまで見ていた夢より数段上の酷評を頂いた。

昨夜、あの後・・・制圧した野盗を縛り上げながらの会話。
「なかなかやるな獣人のねーちゃん。それにそっちのにーちゃん。・・・見たところ人間みたいだけど、魔法使えんのか。もしかして余計なお世話ってやつか?」
「・・・いえ、危ないところでした。助けていただいて感謝しています。」
「そうか。そりゃよかった。・・・ところでこんな時間にこんな所で何してたんだ?」
「それは・・・」
初対面の褌?しか身に着けていない人間に全部話していいものだろうか?いや、まずいだろう。ぼくはノエルの台詞を引き継いで、適当に答える。
「ちょと迷っちゃって。・・・この辺りに休めるような場所とかありませんか?」
嘘は言ってない。褌男は手を休めずこちらを一瞥すると、豪快に笑った。
「ま、人間の男がが獣人の女連れてこんな僻地まで来るってことは、そーゆう事なんだろうけどな。」
どういう事だ。なんだか誤解されてるような気がする。
「それから、近くに村はあるけど、宿なんてものは無いぞ?泊まる場所無いなら、俺んちに来いよ。飯と寝床くらいなら用意できるぜ?」

褌男からの提案にノエルと顔を見合わせる。魅力的過ぎる提案なだけに、何の罠かと疑ってしまう。
「あー。その代わりと言っちゃなんだけど、こいつら運ぶの手伝ってくんね？明日にでも街の守衛に引き渡して謝礼貰って来るから。宿代はそれで足りるから気にすんなって」
多少なりとも筋の通った話をされて不信感が薄まった。再度ノエルと顔を見合わせ、頷きあう。・・・背に腹は抱えられないしね。
「・・・では、お言葉に甘えさせていただきます。」
「お！、そうかそうか。んじゃぁそっちの3人頼むわ。あー・・・」
「ノエルです。彼はハチ。」
「ノエルにハチか。俺はテオだ。よろしくな！」

それからテオの案内で森の中を歩き、ここイツホ村に到着した頃には真夜中になっていた。野盗とクマを自宅前に放り投げたテオは、納屋に入り手馴れた様子で即席ベットを作るとそそくさと退散した。
「んじゃごゆっくり。」
戸を閉めるとき意味深な笑みと言葉を残していったけど、ベットが一つしかないのはそういう事か。ノエルはさっさと横になってるし・・・床で寝よう。
「・・・どうしたの？隣、まだ空いてるわよ。」
「ぇう？」
変な声が出た。
「休めるときにしっかり休まないと。・・・そんなに警戒しなくても、取って食ったりしないわよ」
「・・・・はいじゃぁおじゃまします」
背を向けて横たわるノエルの隣に入り込み、背中合わせになる。目を瞑るけど・・・寝れる訳ないやろー。これはなんだ？もしかして誘われてるの？
「ねぇ」

心臓が跳ね上がって口から出てきたような気がした。一瞬で体が硬直して体温が上がり、口の中がカラカラになる。やましいこと考えてたのがばれたら・・・

「前もさ、こんな事あったよね。」

「・・・ぁー。倉庫に閉じ込められたやつ?」

「そうそう。あの時は焦ったわー・・・もう死ぬまで出れないんだーって大泣きしちゃって。」

ぼくが、だ。

小学校低学年の夏だったと思う。その日遅くまで体育館の倉庫で遊んでいた(空手だかなんだかの練習につき合わされていた)ぼく達は、なぜか見回りに来た用務員に気付かれず、閉じ込められてしまった。暗いわ腹は減るわでパニックになってぼくは大泣きしたんだったっけ。でも確かその後・・・

「殴って泣き止ませるとか、女の子としてどうよ?」

「どうして良いかわからなくなっちゃってねー・・・軽く張っただけじゃない」

どこがだ。記憶が正しければ奥歯が何本か抜ける位の本気グーパンだったぞ?まぁしっかり泣き止んだけどね!その後、朝方になって探しに来た親に起こされるまで、二人でくっ付いて寝ていたらしい。

「・・・あの時はすぐに出れたけど・・・」

今閉じ込められているのは、ボールや跳び箱が詰まった小さな倉庫ではない。脱出の方法も分からない。そもそもそんな方法は無いって可能性もある。

「・・・大丈夫よ。私がハチを・・・・だからハチは・・・。」

いつの間にか襲ってきた睡魔に早々と屈服したぼくには、ノエルの言葉を聞き取ることは出来なかった。

欠伸をしながら納屋を出ると川縁でクマを捌いているテオに声を

かけられた。今日も褌一丁だ。
「さくばんはおたのしみでしたね？」
「・・・おはようございます。それから、ぼくとノエルは従姉妹なんで。」
「ほう？やっぱりなんか複雑な事情があるんだな。でもまあ良いんじゃねぇか？身分の差を越えた愛の逃避行！俺は応援するぜ？」
ベットは二つ貰えませんか？と言う意味で言ったんだけど、話がかみ合わない。なんでそっち方向に持っていくんだ。。
「大体身分制度なんてのは貴族様が手前勝手に決めたもんだからな。この村にそんな事気にする人間はいねーから安心しとけって。」
クマから肉を切り取りながら続ける。血抜きが済んでいるからか、川には殆ど血で汚れていない。ぼくは隣で顔を洗いながらさっきから気になっていたことを聞く。
「所で、凄いですね全身(それ)の刺青。」
「ん？あぁどーだ。かっこいいだろ？」
テオの首から下、つま先まで（おそらく褌の下にも）びっしりと不思議な幾何学模様の刺青が彫ってあった。暗い青色で描かれていたからか昨日の夜は気がつかなかったけど、日の当たる場所で見ると異様な存在感がある。
「各種身体強化系魔法の発動式だ。俺は魔法使えないから村長にやってもらったんだけど、ここまで徹底的なのはそうそう居ないってよ。」
なんだかいろいろ聞きなれない単語が出てきた。どうしよう聞いて見ようか？迂闊な事を聞いて怪しまれるのは避けたいし・・・いっそあらいざらい喋って協力を取り付けた方が楽なんじゃないかな？
「それからよー。ちょっと頼みがあるんだけど」
テオからの呼びかけに思考を中断する。
「はい？なんでしょう？」
「その他人行儀に丁寧に喋るの止めてくんね？なんか落ちつかねーわ」

頬を掻きながらテオが言う。なんだったらアニキって呼んでくれても良いんだぜ?とか言ってるし。
「・・・わかった。でも『アニキ』はちょっと考えさせて。」
真面目に答えたら笑われた。

◇◇◇

朝食はまさかの白米ご飯だった。漬物こそ無かったが、少量の茹でた葉野菜に、焼いた魚の干物。止めに根菜と豆腐の入った味噌汁が出てきた。そのまま日本の朝食風景だと言われても信じれるようなもので、逆に強烈な違和感を発していた。
「どうした?遠慮せずに食えよ。」
当然のように箸を使って食事をしながら、テオが怪訝そうに聞いてくる。隣を見るとノエルもなんとも微妙な表情で固まっていた。きっとぼくも同じような表情(かお)してるんだろうな。
見た目は気持ち悪いほど普通だし、何より昨日から何も食べていないお腹が抗議を上げている。意を決して食べてみる。
「い、いただきます。」
ご飯を一口。炊きたてのいい香りが口いっぱいに広がる。噛めば噛むほどじんわりと甘みが増していく。魚を一口。程よい焼き加減にシンプルな塩味。ご飯が進む。野菜はほうれん草っぽい。茹でた上に醤油?をかけてあるだけのお手軽さながらも、素材のみずみずしさが引き立っている。味噌汁・・・やっぱり日本人のソウルフードは味噌だね。
「うん。普通に美味しい和食だよ」
「わしょく?よく分からんが、口に合ってよかった。ほら、ノエルも食えよ、冷めちまうぜ?」
「・・・頂きます。」

ぼくの様子を横目で観察していたノエルも食べ始める。一口目は恐る恐るといった感じだったが、すぐに黙々と食べ始めた。表情にあまり変化は無かったけど、尻尾が楽しげにゆらゆらと揺れていたところを見ると、気に入ったようだった。

食後には熱い緑茶が出た。もうこの程度では驚かない。

「飲んだら村長のとこ行くぞ。持ってくモノあるからちょっと手伝え。」

着替えた（すそ口の窄まった袴のようなものを履いただけ。上半身は相変わらず。）テオに促され、食卓を立った。

テオから渡された荷物を持って、村の中心への道を歩く。イツホ村は小川沿いに緩やかに集まった二十軒ほどの民家を、水田や畑が囲みその中心を道が貫いているような造りになっている。テオの家は、その川の一番下流、村の入り口付近に一軒だけ離れて建っていた。テオ曰く「流れ者だし獣の加工とかするから」とのことだけど、畑の中から時折親しげな声を掛けられる所を見ると、十分に村人に受け入れられているようだった。

１０分ほど歩くと目的地に着いたらしい。指示された場所に荷物を降ろし、周りを見渡す。どうやら村の中心あたりのようだ。そこはちょっとした広場になっていて道とは違い石畳がしいてあり、今はその上に何人もの村人が座り、農作物、調味料、麻や綿、皮類等の服飾品などなど雑多なものを並べていた。

「えっと・・・フリマか何かかな？」

「通貨じゃなくて、物々交換してるみたいだけど・・・当たらずとも遠からずってとこかしら？」

「ウチ見たいな規模の村じゃほとんど物々交換で済ますぜ？村で取れないものを外から仕入れる時は、流石にそうは行かないけどな」

ぼくとノエルとの会話にテオが補足を入れる。

「交換は後にして先に村長に挨拶に行くぞ。・・・あいつだ」

テオの指差す先には他の村人と同じように瓶を目の前に並べて座

っている羊角の女性が居た。

「よう村長！調子はどうだ？」

「おはようテオ。・・・またか。またなのか。本当に君ってやつは・・・」

テオと話すのは、ふわふわの黒髪に羊の角と耳を生やした妙齢の女性だ。丸メガネの奥の目は鬱陶しそうにテオを睨んでいる。

「まぁまぁ、そう睨むなって。こいつらなら食い扶持は自分で何とかできるから、今回は迷惑かけないぜ？」

「そうかい？それならば良いんだけど。君たち、名前は？」

羊ねーさん（仮）がぼくたちを見る。まだ目つきが悪いのはもともとなのか、歓迎されていないのか。

「ハチです。」「ノエルです。」

「ハチ、ノエル。ようこそイツホ村へ。私はメイゼル。村長をやっている。」

羊ねーさん改めメイゼルさんは何かに拗ねているかのような口調で喋る。目つきの悪さとそれは地のようだ。

「で、だ。君たちは何が出来る？」

メイゼルさんの質問にぼくはノエルと顔を見合わせる。何って何だ？

「えっと・・・何とは？」

今度はメイゼルさんがテオを睨む。睨まれたテオは、慌てて言葉を吐き出す。

「ノエルは強いぞ？軽く野盗をぶっ飛ばせるくらいだぜ？かなり身軽だし。ハチの方は魔法が使えるぜ？どれくらいかは・・・ちょっと分からんけどな！」

なぜだか最後には胸を張って言い切るテオ。フォローになって無いような・・・メイゼルさんも若干頭抱えてるし。

「あの、私裁縫とか料理とかなら出来ますよ？・・・そういう事ですよね？」

ノエルが前に出る。・・・なるほど。何かできる仕事は無いか？ってことか。

「そうそうそういう事だよ。裁縫ねぇ・・・タリサに預けるか。テオ、案内してやりな。ハチは私が見よう。」

よっこらせと立ち上がった瞬間、麻のローブの中で2つの塊がぶるん。と揺れた。健康な男子の常として、目を奪われるが、つま先を踏み抜かれ我に返る。隣を見るとノエルが微笑んでいた。・・・目が全く笑ってない！怖いよっ！

「んじゃ行くか。」

「ええ。お願いします。・・・じゃぁまた後でね。」

微笑みながら手を振ってくるノエル。後で何されるんだろうな？

あははは・・・はは。。

メイベルさんにはぼくを顎で促すと、一軒の家に入っていった。その後に続いて門を潜ると、学校の教室ほどの広さの大部屋があり、子供達が

「あ、村長さんどうしたの？忘れもの？」「そんちょーさんだーそのおにーちゃんだれ？」「もー！けんかするなよー！」「だってけーまがー！」「うっせ！ばーかばーか！」「あー！ばかっていったー！」

そこら中から銃声のように子供の叫び声が放たれる。ここが戦場か。

「違う、すぐに戻るさ。こいつはハチ。テオの所で世話になってる新入りだよ。それと喧嘩してるやつらは昼抜きな。・・・すまんね騒がしくて。歩ける歳になった子供達を、昼の間預かってるんだ。」

子供達の声を聞き分けて返答をしながら言うメイベルさん。流石慣れていらっしゃる・・・。つまりは託児所か保育園ってところかな？よくよく見るとちょっと大きい子供が混ざって世話をしているようだ。

「驚いたか？この村じゃ人間も獣人も区別しないからな。」

お子様達のエネルギーに圧されて固まっているぼくの態度を、何か勘違いしたらしい。テオの話とかと合わせると、やっぱりこの世界には、人間＞獣人というようなヒエラルキーがあるらしい。で、イツホ村は特殊ケースで、人間と獣人が対等だと。

「いえ別に。それにこれくらいの歳だと人間と言うか動物に近いですし。」

全くだ。と笑うメイベルさん。まとわり着いてくるちびっ子を、鬱陶しそうな目で見つつ引き剥がしていくが、その手つきは優しげで、よく見ると目じりも下がっている。子供好きなのかな？

「ま、獣人の私が村長なんてやってる時点で、他から見たら異常って事になるんだがな。・・奥が私の部屋だ。」

2日目（2）

メイベルさんの部屋は物であふれていた。入り口とその正面にある窓、そしてその窓の下に据えてある机以外の壁面は、全て棚で覆われ壁が全く見えない。その棚には本（紙や布等素材はまちまち）や、瓶、水晶玉、ドライフラワー（？）などなど雑多なもので埋め尽くされ、収納出来なかったものが床にまで溢れ、人の領域を奪いつつある。

一つしかない椅子にどかりと座ったメイベルさんは肘掛に寄りかかり頬杖をついた。なんかすんごいダルそうだ。

「で？魔法が使えるんだって？ちょっと見せてみなさい。」

声までダルそうだった。明らかに期待されて無い態度だけど、ぼく自身何が出来るか把握して無いから腹の立ちようも無い。

ぼくは目を閉じ、精神集中して唯一使ったことのある魔法の発射体制に入っ

「ちょあっ！」

突然の奇声と共に脳天に強い衝撃。目を開くと、涙で滲む視界に、肩で息をするメイベルさんが映った。手には厚い本（背表紙が金属製）を持っている。まるで全力で振り下ろした後のように見えるけど・・・

「いきなり何するんですか！？下手すれば死にますよ？」

「そっ、それはこっちの台詞じゃたわけぃ！こっちは確実に死ぬわっ！」

見せてみろって言ったのは誰だっけ・・・。

「まったく・・・本当にいろいろあり得ない存在だな、君は。」

落ち着きを取り戻した後、ぼくに幾つかの質問をするとそう呟いた。

「自分では何がおかしいのかさっぱり・・・。」

微かに赤く光るネックレスを弄りながら、メイベルさんが説明を始める。

「まぁ周りに魔法使いがいなかったと言うのなら無理も無いか。・・・まず、基本的に人間は単独では魔法を使えない。そもそも我々の使う魔法は、獣人が創世の女神から与えられたもので、世界をより良くするための力だとされている。その力を人の手で再現した技術が魔術だ。」

自分の分だけ淹れたお茶を飲み、続ける。ぼくには椅子すら出ない。

「どちらもまとめて魔法と呼ばれる事もある。現象は大して変わらないからな。大きく違うところは二つ。一つ目は発動式だ。魔術にはこれが必要だが、魔法には不要だ。

・・・そうだ。テオの刺青のように、効果の対象に直接書き込む必要がある。他にも杖や宝珠、符なんかに書き込むこともあるが・・・これに起動用の魔力を注ぐ事で効果を得る訳だが、魔法には必要ない。獣人は体内に発動式を持っているという説もあるが、未だに誰も見つけていないよ。」

メイベルさんの目つきが一瞬険しくなり、言葉が途切れた。どんな事がされたのか、或いはされているのか。ぼくには想像することしか出来ない。

「すまん。続けよう。魔術は、発動式を概して効果を発動し、魔法は自信の体を概して発動する。これが一つ目の違いだが、もう一つの違いもこれに関わっている。魔法と言うのは一つの才能だ。個人差は有っても種族によって使える系統が違ってくる。人間のように全く使えない種族もいれば、羊人族（わたしたち）のように二つの系統を使いこなす種族もいる。」

「二つ、ですか？因みにどんな？」

言葉を区切り、喉を湿らせているメイベルさんに質問を投げる。

「活性と熱だ。」

簡潔すぎて理解不能だ。ぼくの不理解を察知したのか、ため息を

一つ。お茶を机に置くと、手招きをする。
近付いたぼくに、今度はしゃがむよう指示を出す。言われた通りしゃがむと、…目の前には二つの魅惑の塊が！これが魔法ですかメイベルさん！
…などと馬鹿なことを考えていたら、いきなりアイアンクローをかけられた。
「因みに私の特技は、素手でリンゴジュースを造ることだ」
ぎり…とぼくの頭を掴む掌に力が加わる。
「ごめんなさい余計なこと考えてごめんなさいぼくの脳汁は美味しくないですごめんなさい！」
掌の力は弱まらない。メイベルさんが何か呟いている。そのうちに頭をだんだんと目の前が真っ白になっていき―

唐突に解放された。

支えを失った上半身が倒れ込むのを感じ、すぐに何か柔らかいものに当たって止まった。
「さっきのお返し…すまん。やり過ぎたみたいだな。大丈夫か？」
ぽん。と後頭部に手が置かれ、今の状況を理解した。ぼくの視界を占領し、両頬に当たっている柔らかくも芯の有る物体は、村長の太ももＬｖ３２（概算）だ。一言で表せば、顔面膝まく
「大丈夫です！全然まったくもって異常有りませんですとも！」
慌てて起き上がり、そのままの勢いで直立不動。多分かお真っ赤になってる…
「クックッ…いや、本当にすまんね。…今のが小治癒（ヒーリング）だよ。患部の代謝を活性化、血行促進、吸熱を複合した魔法だ。どうだい？たんこぶは無くなっただろう？」

確かに本で殴られた痕が無くなっていた。できれば顔の熱もとって欲しかったけど…

「話を戻そう。羊人族は活性と熱の魔法を使える。だが、水や風、生命などの魔法は使えない。だが、魔術は魔法のような技術。つまり、発動式と使い方を知っていれば、誰にでも使うことが出来る。そういうものだ。」

言葉を止め、お茶を飲むメイベルさん。不思議な模様の刻まれた硝子のコップの中身は、どれだけ飲んでも無くならない。

「さて、それを踏まえてだ。人でありながら発動式無しで魔法を使う・・・君は一体何者なのかね？」

刺すように鋭い視線に浮かぶ感情は、紛れもない敵意だ。かすかに震える手に握られた胸元のネックレスは、いつの間にか燃えるように紅く輝いている。

ぼくの頬を一筋の汗が流れた。

「えっと、何のことですか？ぼくにはさっぱり…」

「返答と行動しだいでは君を殺すことになる。…刺し違えてでもな。」

うわやっぱり自爆装置ですかそれ…

ここで全部ばらしたら、後でノエルに捻り潰されるかな？今ここで爆死するのとどっちがましか。…どっちも回避したいな。

「分かりました。話します。…だから落ち着いて？」

それからぼくは異世界から来たことを伏せて全部白状した

「つまり…人間の君と獣人の従姉妹の二人で遊んでいたら、いつの間にか知らない場所に居たと。」

「そうです。」

「で、野盗に襲われたから偶然使い方を知っていた魔法と偶然習得していた格闘技で撃退したと。」

「その通りです。」
「この村に来たのは偶然テオに拾われたからで他意はない、と。」
「おっしゃる通りです。」
「魔法については昨日が初使用で、私の説明を聞くまでどういうものか全く理解していなかった。…その上でしばらくこの村に置いて欲しい、と？」
「完璧でございます。」
「…君は死にたいのか？それとも馬鹿なのか？」
「…ごめんなさい。」
　呆れられた。でも無理心中の危機は一先ず逃れられたようだ。自爆装置（ネックレス）からは既に輝きが失われている。
「賊にしては間抜け過ぎるしな…。いいだろう。君の言い分を信じてやろう。」
　よかったなんとかなったよ！爆死ｏｒ縊死の二択を見事回避！自分を褒めてあげたいね
「ただし、条件がある。…これを付けろ。」
　そう言って取り出したのは…目測で幅３？、直径３０ｃ程のｍ大きめのバックルが付いた首輪だった。
「…そう言う趣味の方だったんですか？」
「言っている意味がよく分からんのだが、とりあえず殴っておけば良いのか？」
「何でも無いですごめんなさい。」
　完全に上下関係が出来ている。自業自得？なんのことやら…。
「これは服従の首枷という。本来受刑者や…奴隷に付けるものだ。刑務官や使役者の魔力を感知して大きさを変えるようになっている。一種の魔法具（マジックアイテム）だ。」
　実際に目の前で手のひらに収まるほどの大きさに縮んだ。もし首についている状態であのサイズになると…窒息どころではすまないだろう。
「効果は距離によらず、自分で取り外すことも出来ない。…そう怖

い顔をするな。これは村長としての最大限の妥協なのだよ。」
首輪を元の大きさに戻し、バックルをはずす。
「どうする？村から出ると言うのなら止めないぞ。」
ぼくは黙って首輪を受け取ると、首に巻いた。

2日目（3）

首輪を着けるとひとりでに縮まり、ぴったりのサイズになった。
メイベルさんが首輪に触れると、微かに暖かくなった気がした。
「定期的に魔力を与えられない場合も、締まるようになっている。死にたくなかったら毎朝私のところに顔を出せ。」
着けた後にわかる新事実！世間一般ではそれを詐欺って言うんですけど？…先に聞いてても首輪を着ける事は了解してただろうけど。
「それから村に居る間は何か仕事をしてもらう。さし当たっては…そうだなこの部屋一の片付けでもやってもらおうか。終わったら私のところに来い。…この部屋には貴重な魔法具や魔術書がある。丁重に扱えよ？」
…これは振り？読んでおけって事なのかな？真意をつかみ損ねているとメイベルさんは席を立ち、部屋を出ようとする。広場に戻るつもりだろう。
「あ、ありがとうございます！」
とっさに感謝の言葉が口をつく。振り返ったメイベルさんは不思議そうな顔をしている。鬱陶しそうな目つきには少なくとも敵意は残っていなかった。
「感謝される様な事をした覚えは無いが。それは一体、何に対しての礼かね？」
「いえ、なんとなく。」
「そうか。…ではしっかりと学んdげふんげふん。片付けは任せた。」
今何か言いかけたな。これも村長としての最大限の妥協ってやつなんだろうか？…単にちょっと抜けてるってだけかも知れないけど。
どちらにせよお許しが出たわけだ。いろいろ見させてもらおう。
まずは…『魔術の起源』これなんかどうだろう。古びた紅い表紙に金文字で題字が書いてある本を手に取り、読み始める。難解な語法

に初めのうちは戸惑ったけど、すぐに時間を忘れるほど没頭した。

◇◇◇

「そんちょーさーん！おひるだよー！」
「わかった。今行く」
「さっきのおにいちゃんもよぶ？ずっとそんちょうさんのおへやからでてこないけど」
「いや。その必要は無いよ。あのお兄ちゃんは、わたしの言いつけた仕事をサボっているみたいだからな。終わるまで飯抜きだ。」
「わー。だめにんげんなんだね？はたらかざるものくうべからずなんだねっ？」
「そういう事だ。…まぁ私がけしかけたのだから同情の余地はあるが、な。」
「どーじょーのよち？」
「独り言だよ。さぁ早く行こう。冷めてしまう」

◇◇◇

手元の字がずいぶん読み辛くなり、ふと顔を上げると夕日が沈むところだった。いつの間にか夕方になっている。読みかけの本を置き大きく伸びをした所で、はたと気付いた。
…片付けとか全くして無い。それどころか読みたい本を引っ張り出したことで、前よりも散らかっている気が。
「そもそも村長さんが振って来たんだし。…いいよね」
誰に聞かせるでもなく言い訳をして、部屋をでようとする。…とたんに首輪が縮まり、呼吸が止まる。
「たわけめ。良い訳があるか」
いつの間にか戸口に寄りかかっていたメイベルさんのつっこみが

はいった。
「私は片づけを命じた筈だけどねぇ…前よりもひどくなるとは、どういった了見かね？」
ぐうの音も出ない。精神的にも物理的にも。…というかそろそろ限界です。
「まぁ言い訳もせず即座に土下座というのは、若干やりすぎだとは思うが」
そう言いつつ倒れこむぼくの首に触れるメイベルさん。やりすぎはあなたですよ？
「げほっげほっ……ヒドイです。」
「すまんな。ちょっと試してみたかったのだよ。なにしろはじめて使うものでな」
これくらいなら死なないのだな。と呟く。聞こえてますよメイベルさん！
「今日はもう良い。お姫様がお待ちだ。」

メイベルさんの部屋を出ると、そこは道場だった。
な…　何を言っているのかわからねーと思うが、以下略。
「あ、お疲れ様ハチ。もう良いの？」
「続きはまた明日ってさ。…で、どうなってるのこれ。」
数人の子供達の前で型を見せていたのは、もちろんうちのお姫様（ノエル）だった。
「稽古付けてほしいって言うからね。暇だったし、私も今日の分やらなきゃだったから、ね。…よし、今日はここまで！また気が向いたら見てあげるわ。」
「「おす！ありがとうございました！」」
この短時間でどうやってここまで仕込んだんだ？流石ノエル。恐ろしい子！
「じゃあ帰りましょ…ところでその首輪なぁに？」
「あー…これはね、」

それからぼくは達は今日あったことを、話しながら歩いた。
「ふぅん…服従の首輪ねぇ。…気に入らないわ。」
「悪さしなけりゃ特に問題ないよ?メイベルさんも…まぁ…悪い人じゃぁないし。」
「…なおさら気に入らないわ。」
蹴られた。何でだ。
「ノエルの方は?えっと…タリサさんだっけ?」
「ええ。気の良いおばさんって感じね。筋が良いって褒められたわ。…そう言えばさっきの子供達の中に、息子と娘が居たわよ。」
「へー?どの子?」
「やたら元気な女の子と、半べそで稽古させられてた男の子ね。…元はと言えばあの娘が言い出したのよ?稽古。」

などと話しながら歩いていると、すぐにテオの家に到着した。そういやテオは明日までいないのか。ほぼ初対面の他人に家を任せるってどうかと思うけど…ありがたく使わせてもらおう。
「あ、そうだ。多分ここにもあるはずなんだけど…。これかな?」
「何それ?お札?」
テオの寝室で見つけたそれは、昼間の本に書いてあった魔法具だ。外見は１０ｃｍ四方の紙で、角の一つに穴を開け紐で綴じてある。メモ用紙にも見えるが、表面には独特の模様ー発動式が書かれている。その内の二枚を毟り取って一枚を頭に当て、呪文詠唱
「＞＞身体浄化（リフレッシュ）＜＜」
符に描かれた魔法が発動し、ぼくの体が一瞬白い光に包まれる。魔術の負荷に耐えられなかった符は一瞬で燃え尽きて灰になり、魔術の効果でぼくはとてもさっぱりしていた。
「この世界ではお風呂は無いか高級品で、普通の人は水浴びかこういう魔法具で体の汚れを落としてるんだってさ。」
「なるほどね。…確かにすっきりするけど、やっぱりお風呂が良いわ。」

ぼくに続いて魔法具を使ったノエルが愚痴る。それについては全面的に同意する。日本人ならやっぱり湯船につからないと。
「それより、燃えちゃったけど…これ消耗品よね？」
「そうだよ。使い捨てじゃないのもあるけど高いっぽいよ。特殊な材料が必要だったり、インクも色々あるみたいでさ」
「ふぅん…セカンドアースのシステムにも、アイテムとかを使った特殊効果付与ってあったし…まずは夕飯にしましょう？情報交換は食べながらでも良いわ。」

夕飯を食べながら、今日の成果を話す。魔法と魔術の成り立ち、その発展の歴史、獣人と人類との関係、等々。
ほとんどが古びた本からの知識だ。それでも、なるべく鮮度が不要そうな本を選んで読んだから問題はないはずだ。

「…私の知ってるセカンドアース世界とは、大分違うわね」
ずっと聞き役に徹していたノエルが、食後の緑茶をすすりながら言った。
「まず獣人が人間に隷属してるなんて設定、無かったわ。それに、ハインランデ大陸？それも初耳ね」
ハインランデというのが、今ぼくたちのいる大陸の名前だ。イツホ村は大陸の南西の端の方にある。
「私だってCβまでの知識しか無いから、Oβで追加された地域って言われたらそれまでなんだけどね…村の人見ててどう思った？」
村の人…？テオに、畑で作業していたおじさん、広場で作物を交換していたおばさん。それにメイベルさんに子供たち…
「普通に純朴そうな農村の人たちって印象かな？農村って実際に見たこと無いけど、ね。」
「そう。人たちなのよね。ＮＰＣでなくって。確かに高度なＡＩもセカンドアースのうりの一つだけど、さすがにこれほどじゃなかっ

たわ」
　つまりどう言うことだろう？
「それに気付いてる？…私たち日本語喋ってないのよ？どういう訳かは解らないけど、まるで自動翻訳されてるみたいにそう認識してるだけで…きっとハチが読んだ本も違う言語で書かれてる。でも昨日の夕方、ログアウトする直前まではそんなこと無かった。」
　そう言えば殆ど気にしてなかったけど、言葉にはまったく不自由して無い。喋るノエルの口元を注意してみると、確かに言葉と同期して無いような…？
「ログアウト前と違う事って言えば、ノエルの見た目も大分変わったね？」
　頷くノエル。その金色にががやく髪からは猫耳がはえている。
「ＰＣ（プレーヤーキャラクター）の設定に不具合でもあったんだって思ってたけど…うーん。」
「仮説だけはいくつか考えられるのよ。でも決め手にかけるのよね…」
　二人で考え込む。

……

……

…

「だめだ。眠い。」
「…そうね。これ以上考えてても仕方ないわ。もう寝ましょう」
　二日目が終わる。

　ちなみに今日も２人で納屋で寝た。
…何もなかったよ？

幕間　オルダレバの街にて

イツホ村から森の境まで半日ほど走り、街道に出てからは乗り合い馬車を使う。半時程果樹園や農場の間を揺られると、高い外壁に囲まれた街に着く。大陸西方州都、オルダレバだ。

市街に入る前に、門にある守衛所に捕まえた野盗を引き渡す。対応したのは馴染みの顔だった。

「なんだあんたか…いや、治安維持活動へのご協力、感謝します。」

「ま、無償じゃねーからな。褒賞金誤魔化さず払えよ？」

「ちっ…じゃあ照合しとくから。受け取りは？」

「明日の昼頃に出るから、そんときだな。」

捕まえた犯罪者は前科等に応じて褒賞金の額が決まる。引き渡した時に即金で褒賞金を受けとることも出来るが、取り調べが簡略化されるため後払いより安くなる傾向にある。

よっぽどの小者、あるいはすぐにでも現金が欲しい事情が有るのでなければ、後払いを選ぶのが普通だ。

「今日はやたらと引き渡しが多くてよ。前払いの小者ばっかりなんだが…牢から溢れるのも時間の問題だな。」

「そんなにか？祭りでもあったか？」

祭りや大市のように人が大勢集まると、当然スリや引ったくりといった小者犯罪者が増える。

「いいや…特に無いんだかな…こそ泥が流行ってるのは事実だ。市内の巡回当番もいつもより多くなってよ。…めんどくせぇ」

「ぼやくなよ。頼りにしてるぜ守衛殿」

離している間にも、狐耳の獣人が引きずられてきた。衣服がベットリ濡れているのは血…ではなく、発動式記述用のインクのようだ。魔法具屋の店主らしき男が報奨金を受け取り足早に去っていく。

「…な？多いだろ？」

「だな。…じゃぁそろそろ失礼するわ」

守衛に別れを告げ市内に向かう。日が暮れる前に用を済ませなければならない。

まず向かうのは大通りから逸れた路地にある魔法具屋だ。

「いらっしゃ…おや、いつもより早いですな？」

「ちょっと、な。んでいつものやつだけど」

「はい、ございますよ。…こちらですね」

店主が取り出したのは、紙とインク…発動式を描くための道具だ。発動式用のインクは主原料は通常の物と同じだが、特殊な鉱石や薬草などの混ぜものがしてあり、詳しいレシピは製作者の秘伝となっていることが多い。色々試した結果、この店のものが「実に良くなじむ」らしい。

「じゃぁこっちの鑑定も頼む。符は＞＞身体浄化＜＜と＞＞看破（ディテクト）＜＜、石の方は＞＞灯火（トーチ）＜＜だ。」

材料を受け取り、換わりに預かってきた魔法具を渡す。どれも消耗品だが、生活に欠かすことの出来ないものだ。

「毎度どうも。…いつもながら見事な出来ですな。差額がこちらになります。」

金貨2枚と銀貨17枚を受け取る。

「…高く買ってくれるのはありがたいけど、これもらい過ぎじゃないのか？」

「いえいえ。お客様の持ち込まれる魔法具はとても評判がよろしいのですよ。十分に儲けが出ておりますので、ご心配には及びません。」

因みに一家4人が一月生活するのに、金貨1枚もあれば十分だと言われている。…子供の相手をしながら片手間に落書きしているようにしか見えなかったが…ぼろいな。

「んじゃ、また来る。」

「はい。またのご来店をお待ちしております。」

次は市場だ。

夕方だというのに、市場は大勢の人でごった返していた。
果物、野菜、魚に肉。軽食をその場で調理して売る屋台や、魔法具屋、占い師なんかも居る。道の両側に連なるそれらを冷やかしながら、目的の店を探す。
その店は市の喧騒から半歩ほど離れて店を構えていた。入り口脇には屈強な用心棒が立ち、道行く人に鋭い視線を向けている。脇を抜け店に入ると、とたんに複雑な臭いが体を包んだ。
爬虫類や動物の干物に、不思議な形の根や茸。得体の知れない粉や葉に…胡椒や鷹の爪。ここは薬屋だ。外にいたものと同じような用心棒に囲まれて座るのは、猫耳の娘だ。
「いらしゃーい。兄さん今日は掘り出し物あるヨー？」
「胡椒を1袋、塩を2袋。あと鷹の爪を2瓶貰おう。」
「今日のはすごいヨー？東の方で取れた喰い付きガメの干物ネ！これ煎じて飲めばもうビンビンネ！こんやはお楽しみネ！」
「必要ないから。ってか俺そんなに枯れて見えるのか…？」
猫耳娘の執拗な売り込みをかわしつつ、金貨5枚の支払いを済ませ用心棒から商品を受けとる。
「まいどー！今日はなんだか物騒ヨー。折角買った商品盗られないよーにネ？お店から出たらウチもう知らんヨー」
「ご忠告どうも。んじゃまた来るよ。」
首もとの鈴をチリンと鳴らしながら手を振る猫耳娘に背を向け店を出る。今日の用は全て終わりだ。宿を探さないと…。

薬屋を出て宿場町に入るまでに5回スリにあった。その都度返り討ちにして担いでいったらスリどころか人自体が寄り付かなくなった。
巡回の守衛にスリの山を引き渡し、適当な宿を取る。一旦荷物を部屋に置き、食事を取るため宿を出る。目指すは『山猫亭』だ。

昼は庶民の胃袋を満たす大衆食堂、夜になれば酒も出る。混みあった店内には歌声や笑い声が絶えず、けっして美人ではないが、笑顔の可愛い看板娘がくるくると動き回る。山猫亭はそんな店だ。

「エールに雉の香草焼き、蚕豆の蒸しパン、山女の姿煮お待ちっ。追加があったら呼んでね！」

熱々の鶏肉をパンではさんで頬張り、エールを流し込む。…生きてて良かった！

「よう！兄ちゃん一人かい？こっちで飲まねーか？」

「お？んじゃお邪魔するぜ。ねーちゃんここエール追加な！」

「いいね兄ちゃん！料理も追加頼むぜ！…心配すんなって！今日は良い儲けでたからおごるぜ！」

こうして夜は更けて行く。

◇◇◇

一西門守衛所内、取調室への廊下。

牢から出された狐耳の罪人が守衛に連れられて歩いていく。本来ならば巡回以外は寝静まっているはずの夜更けに、いまだ取調べが行われている。それほどまでに今日一日の罪人の量は異常だった。

「…守衛さん。子供はいますかい？」

狐耳の罪人が歩きながら呟く。服にぶちまけられたインクが、乾いた血糊のように赤黒い染みを作っている。

「あぁ。居るぞ？今年6歳になるな。…もっともお前達のせいで今日はあえんがな。」

「そうですか。…実はオレにも故郷の村にそれくらいのガキがいましてね。娘と息子何ですが…自分で言うのもなんですが、良く出来た子達なんですよ」

「…子供が居るのに犯罪（つまらんこと）なぞしおって…親が手本を見せんでどうす

るよ？」
　守衛の説教に肩を震わす狐耳の男。うなだれたその顔は…笑っている。
「…ええ。ええ。私が手本を見せなければならないのです。…私達が子供達の未来を守らなければ！お前達人間から守らなければッ！」
「おまえ何を・・・！！発動式だと！？まさかインクは偽装のために…っやらせるかーっ！！」
「もう遅いわっ！＞＞最後の一撃（エクスバースト）＜＜！！解放戦線万歳！！」

　膨れ上がる光の中で狐耳の男は大きな達成感と、少しばかりの後悔を感じていた。
（ごめんなカイナ。リク。お父さん帰るって約束守れなかった。…子供達の事、頼むタ一

◇◇◇

「…何だ今の音」
「あーん？なんかいったかにーちゃん？」
　山猫亭では深夜にもかかわらず宴会が続いていた。すでに半分は撃沈し、残りの半分は泥酔している。
　アルコールに鈍る聴覚で、どこか遠くの異音を感じた気がしてテオは頭を上げた。
「うーん…気のせいかな？爆発音が聞こえたような。」
「んなことよりもっとのめおー。こんやはおれのおこりらー！」
「はいはい。そろそろよしときましょうねー。…私も何か聞こえた気がしたんですけど…なんでしょう？」
　酔っ払いをあしらいつつ、机を片付けに来た看板娘と顔を見合わせる。その時、火事を告げる鐘の連打が聞こえてきた。

「今度は気のせいじゃないな。…西門の方で火事みたいだ。」
「みたいですね。…今日はもうお店閉めますね。皆さん起きてくださーい！」
鐘の音で起きなかった客も、看板娘につつかれ起き始め、三々五々に帰っていった。
テオも（自分の分だけ）会計を済ませ、宿へと向かった。西門の方を振り返ると空が紅く染まっている。
「大分焼けてるな。…やっぱさっきの爆発か？」
すでに消火活動は始まっているようだ。明日出発する頃には収まっているだろう。
（そういやあいつ無事かな…まぁどうせ明日帰りに寄るし、今日は帰って寝よう。）

◇◇◇

「うっわ…これは酷いな。」
「まったくだ。昨日ばっかは巡回当番に感謝しないと。」
翌朝、西門の守衛所に行ってみると、瓦礫を片付けている顔馴染みの守衛に出会った。昨晩はちょうど巡回に出ていて難を逃れたらしい。
「西門守衛所半壊に殉職３人。重軽傷者は守衛罪人一般人こみこみでざっと１００人。その上それ以外の罪人が全員逃走ときた。オレ減給かもしれん。」
「残念だったな。…昨日の異常な罪人の数、あれこれの為だったんだろうな。」
生存者の証言から、犯人とその手口は割れている。
「しかし、『獣人解放戦線』絡みか…あいつらどうにかならんかね？」

「それは守衛殿のお仕事だろう？しっかり頼むぜ。」

獣人解放戦線。獣人を人間の不当な支配から開放することを目的に、各地で破壊活動を続ける過激派集団だ。その理想に共感する者は決して少なくはないが、彼らの所業のせいで獣人の立場が余計に危うくなっているため、獣人の中にも毛嫌いしている者は多い。

（ウチの村長とかゴミ屑呼ばわりしてたもんな…。まぁまったくもって同感だけど。）

「今回の下手人は身元も割れてるしな。西の方の何とかって村に家族が居るとかで、今朝早く騎士団が出てったぜ？」

「貴族様にしては仕事が速いな。」

「あー。なんでも付近にアジトを見つけててマークしてたらしいぜ？それなのにこの様だから、挽回に必死なんだろうよ。」

「なるほどな。…所で報奨金ってもらえるのか？」

「今はちょっと無理だろー。また来たときに出せるように手続きしとくさ。」

「助かる。…んじゃぁ帰るわ」

「おう。気をつけてな……あ。思い出した。イツホ村だ。」

「…え？」

「騎士団が向かった、犯人の家族が居るって村だよ。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3463x/

ハチ公の異世界日記(仮)

2011年10月19日03時10分発行